

大学教育改革における 中国語教員の取り組み

田 禾 教授（人文科学・中国語学）

時代の変化と共に、教育の改革も引き起こされました。教育理念の更新、授業方式の更新、教材内容の更新など、すべての「更新」は教育現場の教員たちにより実現することはいうまでもありません。大学のさまざまな授業の中で、第2外国語且つ選択科目としての中国語を教える教員として、どうすべきであるのかをここで検討してみたいと思います。

グローバルというと、外国語教育を一番に浮かべるかもしれません。本学では、必修科目の英語以外に、中国語、朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語などの第2外国語科目もあります。近年中国経済の急速な発展は世界において注目され、多くの経済学者たちは中国経済に興味を持ち、様々な角度から研究を行っています。このような雰囲気の中で、学生たちも自然に中国語に対して勉強する意欲が湧いてきました。しかし、いまだに日中関係が不安定な状態です。その中で中国語を履修する学生が気持ちよく勉強できる環境をつくるのも教員の責任

であると思います。実は3年前から、本学の中国語教員が企画して、言語コミュニケーションセンターの許可と後援をいただき、毎年の秋学期に「中国文化週」というイベントを開催しています。一週間を通じて、たくさんの方に「中国語スピーチコンテスト」の参加を促し、中国人留学生とペアを組ませて、原稿の修正、発音訂正などの指導を行いました。学生たちは日ごろの中国語の勉強成果を披露でき、更に自信を持つようになりました。また、「留学経験交流」では、中国の生活を実際に体験した学生の留学経験を共有し、中国の現状を知る機会を設けました。これは留学生同士の情報共有だけではなく、これから中国に留学に行く学生への参考にもなり、大変有意義なイベントになりました。更に、実際に中国文化に触れるチャンスを提供するため、学生食堂で「餃子パーティ」も行いました。中国教員、留学生と話しながら、みなさんは中国の家庭料理の水餃子を皮から作り、自分の手で作った餃子を食べることにより、中

国文化の体験もできました。ほかには、中国茶の講座や、太極拳の体験など、中国人の健康理念を理解する機会を提供し、学生たちは異文化の理解を深めることができました。また、中国語を履修していない学生の中国への関心度も高めるためのイベントも行いました。具体的には、図書館のロビーで写真の展示会を行い、観客の投票により優秀作品を選ぶイベントや、また有名人を招待して本学で開催する講演会です。「音楽」を通じて中国に親しみをもってもらうため、中国の歌をお昼の放送時間に流したり、特に今年度は有名な演奏家をお願いして、中国伝統楽器「二胡」の演奏会を行いました。学生たちは美しい曲を聴きながら、中国文化への再認識ができました。このように、授業以外の活動を通じて、キャンパス内の中国語ブームをつくり、中国語を勉強することが楽しいという雰囲気を作り出すことは重要だと思います。

外国語を学ぶ目的は、外国人とのコミュニケーションにあります。日本人は、コミュニケーション

シオンにおいて、最も必要とされる自己表現能力が弱いため、なかなか積極的になれません。頭の中では理解していても、口から言葉が出てこない、つまり「習ったが使えない」ことがよくみられます。習ったものを使う場がなければ、外国語はただの「知識」にすぎません。「知識」から「能力」にするためには、教授者が学習者にとって積極的に取り組むことができる「場」の提供に努める必要があると思います。また、教授者はこの「場」作りを考える必要があります。中国文化週もこの「場」の一種ではないかと思えます。

新しい時代には、授業の改革は教室の中心人物の変化ではないかと思えます。つまり、教授対象にも留意する必要があると思います。「なにを教えたいか」ということに主眼をおいて授業をするべきです。以前、中国語を履修する学生の選択理由は、中国語は漢字を使用する言語だから単位をとりやすいというものが多かったですが、近年は中国ブームで、その理由にも変化が見られるようになりました。中国に興味を感じ、中国語を学びたいという大学生が増えてきたので、これは今までの「義務」として、単なる単位取得のために中国語を学ぶ姿勢とは明らかに異なってきました。本来中国のもつ歴史文化や社会風土、そして近年の急速な経済発展は、日本人を魅了するのに充分なものがあり、魅力を感じ、積極的に知ろう、触れようとする姿勢にこそコミュニケーションは生じるものであり、お互いを知ろうとすれば言葉は自然に出てくる

ものです。つまり、中国に関心を与えるのが中国語教育であると考えています。

学生は様々な分野に興味を持つていることは想像に難くありません。「中国旅行で中国語を使いたい」、「就職にプラスになる資格を取得したい」、「将来中国と関連がある仕事をしたい」、「中国の経済学などを研究する基礎として中国語をマスターしたい」等多種多様です。各分野に応じて、レベル別講座などの形式で、実用的かつ特殊性のある内容豊富な授業を提供できるように、教師はあらゆる考え方を念頭に置く必要があります。また学習者のレベルによって教授内容や教授方法を考える必要があります。しかし、現実的には第2外国語としては、あらゆる種類の授業を提供することは極めて困難です。その解決方法として、教材の編集を工夫しました。2011年から、本学共通教科書の基礎と中級レベルの2冊を教員たちが一緒に作成してきました。内容はできるだけ、中国語の基礎文法をすべてカバーし、使う頻度の高い語彙を取り入れ、自然な会話を設置しました。しっかり基礎を作って、更に中国文化の紹介、旅行に使用できる慣用表現、仕事に使える中国語で書くメールなど、中級レベルの教科書を編集しました。録音のCDも各本文の内容をゆっくりなスピードと自然会話のスピードの2種類を収録しました。このような教材を使用することにより、学生たちは将来さまざまな要求に応じて、更に中国語のレベルをアップさせることが可能になりました。

教授者は常に理論研究と実践は相互補完関係

にあることを念頭におけなければなりません。中国語を教える際、学生の質問に答える際、いずれも正確でかつ理解しやすく簡潔な説明が求められます。それは常に中国語の本質や特徴を簡潔な表現でまとめることの積み重ねであり、中国語教師は教師であると同時に中国語研究者であることが求められているに他なりません。中国語文法に関する研究を進めながら、その成果を教育に活かし、学生が中国語でコミュニケーションできるよう、そして中国を深く理解し視野を広げることができるよう、精一杯努力することは教員のあるべき姿です。そのために、教員たちは学会発表や、ほかの大学教員との教育経験交流会などに積極的に参加し、さらに本学でもこれらの活動を行います。そうすることで教員自身のレベルがアップし、授業水準を高めることが保証され、学生の進歩を最大限に実現するという目標も達成することができるとです。

楽しく勉強できる環境をつくり、学生自身からコミュニケーションの意欲を引き出すことを大前提とします。いい教材を使用しながら、様々なニーズに応じて、しっかりとした基盤の上で、将来性があるように教える。これは「生きる力」を持つ学生を育てる教員の姿勢です。